



イサク献供(創22:1-19) をめぐって

2020年12月20日

経堂聖書会オンライン日曜講座

<物語>

神は、愛する一人息子イサクをモリヤの山で、全焼の供犠として献げよ、とアブラハムに命ずる(1-2節)。

アブラハムは従者と共に薪の準備をし、イサクを連れてモリヤに向かう(3節)。

3日目、アブラハムは従者を残し、イサクに薪を背負わせて、モリヤの山に上る(4-6節)。

イサクが供犠に献げる子羊について尋ね、アブラハムは「子羊は神自身が備えてくださろう」と応じる(7-8節)。

指示された場所に着き、アブラハムは祭壇を築き、薪を並べ、イサクを縛って、屠ろうとする(9-10節)。

ヤハウエのみ使いがアブラハムを制して、彼が「神をおそれる者」であることがわかった、と告げる(11-12節)。

アブラハムが目を上げると、藪に角をとられた雄羊が目にとまり、彼はこれを息子の代わりに全焼の供犠として献げた(13-14節)。

アブラハムはヤハウエの使いから、子孫を天の星、海辺の砂のように多くする、との約束を与えられ、イサクおよび従者とともに、ベエルシェバに帰る(15-19節)。

<新約聖書時代のユダヤ教側の解釈(1)>

この物語はユダヤ教の伝統では9節からアケダー「縛り」と呼ばれ、強烈な印象を与えるがゆえに、すでに古代から様々な解釈が試みられてきた。

アレクサンドリアのフィロン：『アブラハムについて』(Philon, De Abrahamo, xxii-xxxvi)。フィロンはエジプトのアレクサンドリアで活躍したユダヤ人哲学者(前20頃～後50年頃)。プラトン哲学を基礎とする聖書の寓意的解釈を提唱した。

フィロンによれば、幼児供犠を習慣とする野蛮な民族もあり、敵による攻撃や疫病の蔓延などの災禍から免れるために子供を供犠として献げる場合もある。栄誉のために息子を犠にする者もいる。殉死の習慣も知られる。しかし、アブラハムによるイサク献供はそれらとは異なる独自性がある。

- ①**彼は神の命令に決然と従った**(「従順」)。
- ②**命令を誰にも知らせずに実行した**(「栄誉」のためではなかった)。
- ③しかも、イサクは老年になって授かった**愛する独り子**であつた。

→ 前例のないアブラハムの偉大さがあつた。

<新約聖書時代のユダヤ教側の解釈(2)>

F・ヨセフス。ヨセフス(後37年頃～100年頃)はユダヤ人歴史家。ローマで『ユダヤ戦記』『ユダヤ古代史』などを執筆。『ユダヤ古代史』(秦剛平訳、ちま学芸文庫)I xiiiに「イサク供」物語を補いながら再話。

何ものにもましてイサクを熱愛したアブラハムに神はそれまで与えてきた**恵み列挙**したうえで、**神への献身(thrēskeía)**を試すべく、イサク献供を命じた。アブラハムは神の命令に従うことを決意し、**妻と僕たちには打ち明けなかった**。イサクは**25歳**であった。

祭壇ができ、薪を積まれると、アブラハムはイサクに神の命令を告げるとともに、神は病気や戦争などの災いによって生命が断つのではなく、お前の生命を受け止めようとしているのであるから、**勇気をもって耐えてほしい**、と語る。イサクはそれに対して「**神と父の決定を斥けるようであれば、この世に生まれる必要はなかった**」と答え、いさぎよく祭壇に向かう。

剣を振りかざすアブラハムを制止した神は、アブラハムの**献身の熱心さ**を知って、イサクの**長命ほかを約束**したので、二人は抱き合って喜んだ。

「イサク献供」の場面を描くベト・アルファ(イスラエル)の
シナゴグの床モザイク。5世紀

